

旭堂 鱗林 (きょくどう りんりん) さん 講談師



人生の経験すべてが 仕事の糧に 目指すは 「芸どころ名古屋の復活」です なでしこ力

Power of Nadeshiko

名古屋で唯一の女性講談師（名古屋市熱田区）として、愛知や大阪を中心に各所で活動を続ける旭堂鱗林さん。大須演芸場の公演では目の肥えたファンが集まる。講談以外に司会業などの依頼も多く、「毎日、仕事やら稽古やら色々あります。回遊魚みたいです」と語る。若い時から活躍しているように見えるが、様々な職を経験し弟子入りしたのは30歳を超えていた。

休みなしで仕事に向かう毎日

鱗林さんの公演は、古典講談と創作講談が半々。古典を含めて100以上で、創作に限ると約50席あり今も増え続けている。巧みな話術を買われ、司会として呼ばれることも少なくない。大須演芸場の観客は芸事に目の肥えた60歳代～70歳代が中心。他所での仕事は、客層も年齢も地域もばらばらだ。観客の様子を見ながら内容も語り口も変えていくので「一つとして同じ公演はありません」と話す。

鱗林さんの講談の舞台は、お寺や喫茶店、大須演芸場から千人を超えるホールまで規模も場所も多彩だ。休業した大阪でも出演、日本各所から声がかかる。「司会業やタレント業も含めて毎日、やる事があります。回遊魚みたいです」と淡々と語る。

地元での活躍はどんどん広がり、官公庁の信頼も厚くなり、「名古屋観光文化交流特別大使」「愛西市観光大使」のほか、講談「藤井聡太物語」が縁で、「瀬戸市広報大使」も引き受けている。



激しく動いての講談公演。夏場は汗まみれに（名東文化小劇場）

会場の空気を瞬時に変える力量

会場の大小に関係なく、鱗林さんが舞台上に出てただけで会場の空気が一気に引き締まる。緩急をつけ、たっぷりと巧みに「間」をとり、大きな身振り手振りでの語りに観客は引き寄せられ、最後は観客が引っ張られていく。良い意味で「会場全体を手玉に取る語り」で、観客が心地良くなるという不思議な感覚になる。まさに若手実力派である。

大須演芸場は2015年に体制が変わり、新大須演芸場になった。鱗林さんは体制が変わる前も後も出演をし続け、今も固定客をつかんでいる。大須演芸場での講演後は、演者が公演を見終えて帰る人をお見送りしているが、そのとき観客から「楽しかった」「来てよかった」と言われるのがうれしいと話す。「生活の中で時間を割いて演芸場に来てくれるのですから、いい時間にしてもらいたいじゃないですか」。

常に目的を持ちまい進

鱗林さんは名古屋市熱田区で生まれ育った。アイドル好きの元気な少女は、公務員の父親と母親のもと、しつけは厳しかったが愛情をたっぷり受けて育った。中学時代は全国クラスの強豪ソフトボール部に所属、練習に明け暮れ、3年生でキャプテンに。部員をまとめる難しさにも立ち向かいながら、全力で取り組んだ。

短大卒業後、「成長に携わる仕事がしたい」